

平成 22 年 6 月 21 日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20830110
 研究課題名（和文） 親の威厳ある養育態度と教師の威厳ある指導態度に関する研究
 研究課題名（英文） Research on parents' and teacher's authoritative attitudes toward children

研究代表者
 遠山 孝司 (TOHYAMA TAKASHI)
 新潟医療福祉大学・健康科学部・講師
 研究者番号：50468972

研究成果の概要（和文）：親と教師の子どもに対する養育態度，指導態度を「受容」「統制」「心理的自律性の尊重」の3つの下位概念からなる威厳ある養育態度，指導態度として捉え，それらが子どもに与える影響を検討した。小学校，中学校，高校の教師の威厳ある指導態度は子どもの学校適応感，学習動機づけ，将来の信頼感にポジティブな影響を与える可能性が示された。子どもの頃の親の威厳ある養育態度は大学生のセルフ・ハンディキャッピングという不適応な自己提示を低めることが示された。

研究成果の概要（英文）：The influences of parents' and teachers' authoritative attitudes toward children were examined. Parents' and teachers' authoritative attitudes consisted of three subordinate conceptions of "Acceptance", "Behavioral Control", and "Psychological Autonomy". At elementary school, junior high school, and high school, it was suggested that teachers' authoritative attitudes had positive influences on child's school adjustment, motivation for learning, and trust. It was shown that parents' authoritative attitudes toward children lowered a university students' self-handicapping, maladaptive self-presentation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,370,000	411,000	1,781,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,570,000	771,000	3,341,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：親の威厳ある養育態度，教師の威厳ある指導態度，小学校・中学校・高校，学校適応感，学習動機づけ，信頼感，セルフ・ハンディキャッピング，体罰と養育の一貫性

1. 研究開始当初の背景

子どもに対する親の養育態度に関する研究の中で威厳ある養育 (authoritative

parenting) という概念を用いて親子関係をとらえる一連の試みが国外には存在する。この威厳ある養育という概念は Baumrind

(1967)が社会化のコンピテンスを検討する中で提唱したものである。Steinberg, Lamborn, Dornbusch, & Darling (1992)は、威厳ある養育態度を①両親の受容、②厳しさ、③心理的な自律性の尊重の3つがそろって高い状態であるとした。

この親の威厳ある養育に関する一連の親子関係研究は、親が家庭において「威厳」を示していることが子どもの成績(Baumrind, 1991; Dornbusch, Ritter, Leiderman, Roberts, & Fraleigh, 1987; Steinberg et al., 1992; Strage & Brandt, 1999)、学校活動への積極的な参加(Steinberg et al., 1992; Strage & Brandt, 1999)、学習および社会的な動機づけやコンピテンス(Baumrind, 1991; Lamborn, Mounts, Steinberg, & Dornbusch, 1991; Strage & Brandt, 1999)を高め、心理的・行動的な問題の発生率(Baumrind, 1991; Lamborn et al., 1991)を低くすることを確認している。このように親の威厳ある養育態度についての国外の研究は一貫して、子どもにポジティブな影響を与えることを示してきた。しかし日本では親の養育態度を「受容」「統制」「心理的自律性の尊重」の3側面にとらえ、それらを組み合わせた「威厳ある養育態度」の影響を検討する試みはなされていない。そして、教師の指導態度に関しては「威厳ある指導態度」という概念が国内、国外ともに提唱されていないのが現状である。

親の養育態度および教師の指導態度について、威厳ある養育態度の3側面のうちの1つ、もしくは2つの組み合わせの効果を扱う国内での研究として、親が子どもに対して受容的であること(松山, 1979; 三隅・阿久根, 1971; 小野寺, 1993; 谷井・上地, 1994; 戸ヶ崎・坂野, 1997)、自律性を尊重していること(清水, 1999; 谷井・上地, 1994)、受容的かつ統制的であること(文野・藤田, 2000)、サポートティブであること(福岡・橋本, 1992, 1995; 石毛・無藤, 2005; 岡安・嶋田・坂野, 1993)などの有効性を示唆する知見はそれぞれ得られている。また、教師の指導態度に関しても教師が受容的であること(浜名・松本, 1993; 河野, 1988; 小林・仲田, 1997; 三島・宇野, 2004; 山本・仲田・小林, 2000)、自律性を尊重すること(鹿毛・上淵・大家, 1997)、受容的であり同時に統制的であること(河村, 1996; 河村・田上, 1997c, 平田・菅野・小泉, 1999; 松原, 1990; 三隅・矢守, 1989; 三隅・吉崎・篠原, 1977; 佐藤, 1993; 佐藤・篠原, 1976; 吉崎, 1978a)が、子どもにポジティブな影響を与えることがそれぞれ示されている。

親の養育態度についても教師の指導態度についても、「受容」「統制」「心理的自律性の尊重」の3つがそろって高い状態を威厳の

ある態度として、そのような養育態度や指導態度が子どもに与える影響を検討した研究はこれまで日本には存在しない。しかし、親であれ教師であれ、子どもを受容するだけ、または心理的な自律性を尊重するだけでは、子どもを導くには不十分であり、統制するだけでは、子どもののびのびとした自主性や積極性を育てることはできない。小学校学習指導要領(文部科学省, 2004a)、中学校学習指導要領(文部科学省, 2004b)、高等学校学習指導要領(文部科学省, 2004c)の全てにおいて、「自ら学び自ら考える力の育成を図る」また「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」とある。つまり「自分で考え決断する」子どもを育む可能性のある「心理的自律性の尊重」を含めた総合的な親の養育態度と教師の指導態度について検討する意義はあると思われる。本研究は親の威厳ある養育態度の研究を国内で行うというだけでなく、新たに教師の威厳ある指導態度を提言する研究と位置づけられる。

2. 研究の目的

(1) 教師の威厳ある指導態度の影響

小学校、中学校、高校のそれぞれの校種における、教師の威厳ある指導態度と学校適応感と学習動機づけ、信頼感の関係を検討し、教師の威厳ある指導態度が子どもに与える影響を探る。

(2) 親の威厳ある養育態度の影響

子どもの頃の親の威厳ある養育態度とセルフ・ハンディキャッピング、子どもが認知している親の養育態度の一貫性、体罰の経験の関係を検討し、親の威厳ある養育態度が子どもにどのように認知されており、子どもにどのように影響しているのかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 教師の威厳ある指導態度の影響

大学、専門学校に通う126名の大学生と178名の専門学校生、合計304名の協力を得、調査を行った。

調査協力者に以下の内容について調査を行った。まず現在の信頼感(天貝, 1995)、小学校、中学校、高校の頃の教師と親について、「受容」「統制」「心理的自律性の尊重」という3つの下位概念からなる教師の威厳ある指導態度尺度(遠山, 2005)に評定をもとめた。続いて小学校、中学校、高校の各校種における学校適応感および学習動機づけについて、「学習意欲」、「友人関係」、「進路意識」、「教師関係」、「規則への態度」、「特別活動への態度」という6つの下位概念からなる学校適応感尺度(高瀬ら, 1986)と算数、国語、理科、社会、英語、数学などの各教科に

に対する動機づけを測る学習動機づけ尺度（中谷・遠山・出口，2002）に評定をもとめた。

上記調査内容の回答を分析対象とし、小学校、中学校、高校の教師の威厳ある指導態度が子どもに与える影響について検討した。

(2) 親の威厳ある養育態度の影響

大学生 339 名の協力を得、調査を行った。

調査の内容は日本語版セルフ・ハンディキャッピングスケール (SH23: 沼崎・小口, 1990)、子どもの頃の親の養育態度 (PAAS: 遠山, 2005)、子どもの頃親に叱られるときに手を挙げられた経験の頻度、子どもの頃の親の養育の一貫性についての評価であった。これらの調査の回答を分析対象とし、親の威厳ある養育態度と青年のセルフ・ハンディキャッピング、子どもが認知している親の養育態度の一貫性を検討した。さらに、親による体罰が親の養育態度の認知に与える影響を補足的に検討した。

4. 研究成果

(1) 教師の威厳ある指導態度の影響

それぞれの尺度について下位尺度得点を求め、校種ごとに教師の威厳ある指導態度の下位尺度（受容、統制、心理的自律性の尊重）の平均値を基準に、L 群と H 群に分類し、その後、小学校、中学校、高校のそれぞれの校種で威厳ある指導態度が子どもの同時期の学校適応感や学習動機づけ、将来の子どもの信頼感に与える影響を検討した。小学校、中学校、高校のそれぞれのデータについて、独立変数を受容 (L/H)、統制 (L/H)、心理的自律性の尊重 (L/H) とし、従属変数を同時期の学校適応感および学習動機づけ、現在の信頼感の各下位尺度得点とする 3 要因の分散分析を行った。

分析の結果、小学校、中学校、高校の全ての校種において、教師の受容、統制、心理的自律性の尊重を高いと感じていることが学校に対する適応的な評価や高い学習動機づけ、将来の信頼感につながっていた。教師の受容が高いことが好ましい影響を与える領域として、小学校では教師関係と文系科目の学習動機づけ、将来の不信感、中学校では友人関係と教師関係、高校では特別活動への態度が挙げられる。教師の統制が高いことが好ましい影響を与える領域として、小学校では規則への態度、中学校では規則への態度と文系科目の学習動機づけが挙げられる。教師が児童生徒の心理的自律性を尊重することで好ましい影響を与える領域として、小学校では友人関係、中学校では進路意識と教師関係、特別活動への態度、理系科目の学習動機づけ、高校生の進路意識が挙げられる。ここから小学校から高校までの間に教師が威厳ある指

導態度を示すことが子どもに好ましい影響を与える可能性が示されたといえる。

さらに、さまざまな領域において交互作用が確認され、受容、統制、心理的自律性の尊重の 2 つまたは 3 つの下位概念の組み合わせによって異なる影響が示唆された。小学校の進路意識は教師の受容と自律の高低の組み合わせによって異なる。小学校の教師の威厳ある指導態度の 3 つの下位概念の高低によって将来の自分への信頼が異なっていた。中学校の教師の威厳ある指導態度の 3 つの下位概念の高低によって将来の自分への信頼、他人への信頼、不信が異なっていた。高校の教師の威厳ある指導態度の 3 つの下位概念の高低によって高校での友人関係と教師関係、文系科目の学習動機づけ、将来の他人への信頼が異なっていた。

校種による違いは、教師の威厳ある指導態度の影響の現れる領域だけでなく、教師の指導態度の下位概念の高低の組み合わせによって示される影響の違いとしても示された。小学生に対して教師の受容と統制がそろって高いことが、小学校での進路意識や教師の心理的自律性の尊重が低い場合の将来の自分への信頼にポジティブな影響を与えることが示された。教師の受容と統制がそろって高いことが好ましい子とを示すこの結果は教師の指導態度を PM 理論でとらえた三隅ら (1977) の知見と整合的である。中学生に対しては、将来の信頼感について、教師の受容と統制が高く、心理的自律性の尊重が低いという組み合わせが好ましい影響を与えることや、受容と統制が低く、心理的自律性の尊重が高いという組み合わせが好ましくない影響を与える可能性が示された。中学生の時期に教師が受容も統制もしているが、心理的自律性の尊重が十分でないと感じることが、将来において自分への信頼や他人への信頼を高く持つことにつながるようである。また、受容も統制もしないが心理的な自律性の尊重のみ高いという指導態度が将来の他人への信頼を低め不信感を高める可能性が示された。この結果から、そのような態度をとることが中学生に教師から見捨てられたような印象を与える可能性が推察される。高校生に対しては友人関係や教師関係、文系科目の学習動機づけ、将来の他人への信頼について、受容が高いが統制と心理的自律性の尊重が低いという指導態度が、生徒の高校でのまたは将来の適応につながることや、中学校で好ましい態度とされた受容と統制が高く、心理的自律性の尊重が低いという指導態度が高校での友人関係や教師生徒関係、文系科目での学習動機づけにネガティブな影響を与えることが示唆された。これらの結果から、好ましい教師の指導態度が子どもの発達や校種の移行に伴って変化する可能性が考えら

れる。

(2) 親の威厳ある養育態度の影響

現在のセルフ・ハンディキャッピングおよび子どもの頃の親の威厳ある養育態度について、それぞれ下位尺度得点を求め、親の威厳ある養育態度の下位尺度（受容、統制、心理的自律性の尊重）の平均値を基準に、L群とH群に分類し、その後、男女それぞれについて、親の威厳ある養育態度が子どもの将来の子どものセルフ・ハンディキャッピングに与える影響を検討した。独立変数を受容（L/H）、統制（L/H）、心理的自律性の尊重（L/H）とし、従属変数をセルフ・ハンディキャッピングの下位尺度得点（can't 得点, wouldn't 得点, SH 得点）とする3要因の分散分析を行った。

分析の結果、親の威厳ある養育態度は子どもの性別にかかわらずセルフ・ハンディキャッピングという不適応な自己提示を低めることが明らかにされた。ただし、セルフ・ハンディキャッピングの下位概念に対する影響については子どもの性別による違いがわずかであるが見られた。

男子に対して親が心理的自律性を尊重することで、課題に取り組む前から上手くやれないという自己提示を将来しなくなるようになること、親が受容することで、課題に向けて一生懸命やらないという自己提示をしなくなることで、親の統制と心理的自律性の尊重がそろって高い場合に、統制が高く、心理的自律性の尊重が低い場合に比べてセルフ・ハンディキャッピングをしなくなることを示唆された。女性については、親が心理的自律性を尊重することで、将来課題に取り組む前から上手くやれないという自己提示やセルフ・ハンディキャッピングをしなくなるようになることが示唆された。

親の威厳ある養育態度と親の体罰、子どもが認知する親の養育の一貫性の間には次のような関連が示唆された。男子の親の受容と自律の尊重が親の養育は一貫しているという感覚を高めている。男子に対する体罰の経験を親にだめなものだめだと教育された経験としてとらえられている。養育の一貫性については女子も男子と同じようなとらえ方をしているが、体罰に対する意識は異なり、女子の場合体罰されることで親からの受容と自律の尊重の認知が低くなることを示唆された。これらの結果は男女で体罰という親の養育行動の解釈の仕方が異なることを示唆するものである。これは子どもの性別によって親が取るべき養育の方略が異なる可能性が示されたといえる。

(3) 成果のまとめと今後の課題

子どもを養育、教育する立場にある親と教

師が子どもとどのような関係性を持つことが好ましいかという問題は古くから論じられてきた。本研究では、親と教師の子どもに対する養育態度、指導態度を「受容」「統制」「心理的自律性の尊重」の3つの組み合わせとして捉え、威厳ある養育態度がどのような影響を与えるのかを検討した。その結果、受容、統制、心理的自律性の尊重の組み合わせによって子どもに与える影響が異なるという結果は教師の威厳ある養育態度においても親の威厳ある養育態度においても示された。これらの結果から、3つの概念の高低の組み合わせは子どもにとって質的な違いをもたらすものであり、受容、統制、心理的自律性の尊重を加算的に理解するべきでないことが確認されたといえる。

また、教師の威厳ある指導態度ならびに親の威厳ある養育態度は受容、統制、心理的自律性の尊重がそろって高いことと定義されているが、そのような指導態度が他の指導態度と比べて常によいということは本研究においては示されなかった。しかし、3つの下位尺度得点の高低の組み合わせで期待できる適応が異なることや、3つの下位尺度得点がそろって低いことが、そうでないことよりも不適応的であることが複数の領域で示されており、教師の威厳ある指導態度、親の威厳ある養育態度は、その有効性について今後さらに検討する必要はあるが、3つの下位概念でとらえることの妥当性は今回確認できたといえる。本報告書に記した親の威厳ある養育態度についてもセルフ・ハンディキャッピング以外にも学校適応感、学習動機づけなどに関連するかどうかを検討するデータを収集したが、期間内の公表には至らなかった。今後の課題として、まずは収集したデータの分析、公表が挙げられる。

また、本研究では、調査協力者の回想的なデータを扱った。大学生や専門学校生に過去を想起してもらう方法は、時間の経過に伴い記憶や印象がわずかばかりでも変化している可能性は否定できない。さらに、本研究においては、教師の威厳ある指導態度の評定はそれぞれの校種の教員のイメージについて求めており、具体的な一人の教員についてその指導態度を評定しているわけではない。今後は小学生、中学生、高校生を対象として担任教師についての評定を扱うなど一人の教員の指導態度が与える影響を検討する中で、本研究において得られた知見の一般性を確認する必要がある。また、大学生や社会人などの成人期の人間に対して指導、教育を行うような場合に、指導者、教育者がどのような態度で臨むことが好ましいのか、という視点からも幅広い年代を対象とした研究も待たれる。

さらに、親の養育態度において見られた性

差を教師の威厳ある指導態度についても検討することで、男子生徒と女子生徒に対して教師が取るべき態度が異なるのかも、検討する必要があるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 遠山孝司 (2010). 教師の威厳ある指導態度と学校適応感, 学習動機づけ, 信頼感との関連 新潟医療福祉学会誌, 9(2), 48-56. (査読有)
- ② 遠山孝司 (2010). 親の体罰と養育の一貫性を決定する要因 -親の威厳ある養育態度が体罰や一貫性の認知へ与える影響- 日本発達心理学会第21回大会発表論文集, 484. (査読無)
- ③ 遠山孝司 (2009). 親の威厳ある養育態度とセルフ・ハンディキャッピングの関連 日本心理学会第73回大会発表論文集, 1237. (査読無)
- ④ 遠山孝司 (2009). 親の威厳ある養育態度と子どもが感じる一貫性および体罰経験の関連 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 209. (査読無)

[学会発表] (計3件)

- ① 遠山孝司 (2010). 親の体罰と養育の一貫性を決定する要因 -親の威厳ある養育態度が体罰や一貫性の認知へ与える影響- 日本発達心理学会第21回大会 平成22年3月27日 於 神戸国際会議場
- ② 遠山孝司 (2009). 親の威厳ある養育態度と子どもが感じる一貫性および体罰経験の関連 日本教育心理学会第51回総会 平成21年9月20日 於 静岡大学)
- ③ 遠山孝司 (2009). 親の威厳ある養育態度とセルフ・ハンディキャッピングの関連 日本心理学会第73回大会 平成21年8月26日 於 立命館大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠山 孝司 (TOHYAMA TAKASHI)
新潟医療福祉大学・健康科学部・講師
研究者番号: 50468972